いのちと地域を守る　毎月11日掲載　防災・減災のページ

■ペット同行避難 飼い主と自治体に求められる備え

日頃からしっけや訓練

考える

東日本大震災を教訓に環境省は昨年、犬や猫のペットと飼い主は一緒に避難する「同行避難」を原則とし、地方自治体に環境整備を促す災害時におけるペットの救護対策ガイドライン（指針）を作成した。同行避難の実現には、自治体だけでなく、飼い主にも日頃の備えが求められる。

環境省が指針

災害時におけるペットの救護対策ガイドラインは、平時と災害発生時に分け、飼い主と自治体が行うべき対策＝表＝を例示している。

飼い主には①ペットのしつけと健康管理②迷子にならないための対策―を促す。自治体には①同行避難②ペットの保護に多くの努力が割かれたりするなど、同行避難しない飼い主の生活再建を後押しする。同行避難を前提に、飼い主と自治体がそれぞれ、事前の備えを進めてほしい」と話す。

災害に備えた飼い主と自治体の対策例

飼い主 平時	●住まいの防災対策 ●ペットのしつけと健康管理 ●ペットが迷子にならないための対策（マイクロチップによる所有者明示） ●ペット用の避難用品や備蓄品の確保 ●避難所や避難ルートの確認
飼い主 被災時	●人とペットの安全確保 ●ペットとの同行避難 ●避難所・仮設住宅におけるペットの飼育マナーの遵守と健康管理
自治体 平時	●ペットの適正な飼育、災害への備えに関する飼い主への普及啓発 ●ペットとの同行避難を含めた避難訓練
自治体 被災時	●ペット同行避難者の避難所への避難誘導、支援 ●避難所・仮設住宅におけるペット同行避難者の受け入れ ●避難所・仮設住宅におけるペットの適正な飼育に関する指導 ●被災住民等への動物救護及び飼育支援に関する情報の提供

※環境省災害時にあるペット救護対策ガイドラインより抜粋

怖がる愛犬をケージへ

同行避難のキーワードの一つが、クレートトレーニング。日頃からケージ（おり）に入れて、しつけをすることを指す。動物の防災に取り組むNPO法人エルピーカーニュープ（仙台市）理事の小野裕之さんは呼び掛ける。

「譲渡策の一つとして、ケージに愛着のある飼物や大好きなおやつを置く、中に入っておやつを食べるペルルに取り組むNPO法人エルピーカーニュープ（仙台市）理事のかは出すが、外ではおやつ後藤美佐さん48と、愛犬ペルルにトレーニングを実演してもらった。

「最初はケージが怖くて入れない犬もいる。慌てず、時間をかけて安心できる場所だと認識させてほしい」と後藤さんは呼び掛ける。

強制禁物 おやつで誘導

ペルルは扉が閉まることが分かれば、ケージが好きになる。

ケージの出入り口には扉がある。ペルルは扉が閉まっても平気だが、閉められた時は慌てる。

ケージの中におとなしく待機するペルル

ペットと一緒に避難するために、飼い主はほどのような準備が必要なのか。同行避難の普及啓発に取り組む仙台市獣医師会の小野裕之副会長に聞いた。

◇

まずポイントになるのがしつけ。避難所では騒ぐ声が問題になるため、ケージに入って、おとなしい状態を保てるようにする。「待て」「おいで」の指示に従うことや、決められた場所で排せつができることも大事だ。

これらは他人への迷惑を防ぐだけでなく、普段から慌てておけば、ペット自身、家族の負担も軽減される。同様に、ペット用の備蓄も、ドッグフードや水、食器、トイレ用のシートなどだ。お気に入りのおもちゃを持って行くと、ペットは落ち着く。

被災時に速やかに避難できるように、前もって最寄りの避難所を知っておくべきだろう。建物の倒壊や倒木の可能性を考えて、複数の避難ルートを設け、所要時間を調べてほしい。

避難所のペットスペースの有無や、生活のルールについて確認も必要だ。地域の防災訓練に参加するなどして、避難所運営に関わる人たちと、同行避難の認識の共有を図りたい。

狂犬病や混合ワクチンの接種は当然として、ノミやダニの予防もペットを伴う避難生活では重要になる。

仙台市獣医師会副会長
小野裕之さんに聞く

避難所とルール 確認を

■障害者施設利用者らと車で内陸へ（名取市）

素早い行動 全員が助かる

伝える　2011.3.11

社会福祉法人「みのりの会」は、海から約1キロ離れた名取市下増田で障害者支援事業所を運営していた。主任支援員目黒恵美子さん49は大津波警報を知り、利用者40人、同僚30人と内陸へ避難した。

目黒恵美子さん

施設は午後3時が帰宅時間でした。地震が起きた時は、帰宅前のお茶会の時間で、利用者が食堂などで2カ所に集まっていました。

揺れが始まると、動き回る人、怖い怖いと泣き叫ぶ人、職員は「大丈夫だよ」と声を掛け、頭に毛布をかぶせたり、テーブルの下に身を隠すように促したりしながら、落ち着かせました。

防災対策無線は鳴りませんでした。携帯電話のワンセグで仙台港6メートルの大津波警報を知り、避難することにしました。

施設の玄関には鍵に、帰宅用の車が待機していました。

利用者と職員は10人乗りのリフト車4台や軽トラックなどに分乗しました。

この時、職員が持ち出したのは利用者のお薬だけでした。すぐに戻れると思っていました。停電でエレベーターが止まっていた状況で、職員は施設の全員が歩いて上に移動させるのは難しいと判断し、車でさらに内陸へ移動することにしました。

隣の市民体育館に到着後、職員は携帯電話を使ったり、自動車で直接訪問したりして、利用者の家族に連絡し、海に近い施設は大きな被害を受けました。

津波は美田園駅周辺にまで迫り、海に近い施設は大きな被害を受けました。

利用者と家族は日常生活を早く取り戻せるように、内陸部の仮施設で3月分だけに支援事業を再開しました。

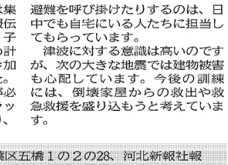
2013年4月に名取市上余田の新施設に移りました。津波で家族を亡くした利用者もいます。現在、利用者の「家」となるグループホームの設立準備をしています。

振り返ると、迅速な避難ができたのは、利用者が集まっていたと、本人が待機していたことなので、幾つもの運が重なった結果でした。職員がいない時間帯だったら、今回のように素早く動かなかったかもしれません。私は利用者に救われたと思っています。

目指しました。動きだしが早かったため、渋滞には遭いませんでした。

美田園駅近くの空き地に集合し時点で、大津波警報は10万人になっていました。近くの企業から上の階に逃げるように声掛けされました。車いすの利用者も乗せました。

津波で大きな被害を受けた社会福祉法人「みのりの会」の施設＝2011年3月22日（みのり会提供）



■運転者の行動から車の流れ予測

適切な避難計画 提案

探る

東北大助教　金　進英さん

2011年3月11日に発生した東日本大震災の経験から、津波による浸水内陸に到達し、徒歩では避難が間に合わない地域があることが分かった。各自治体は、徒歩に加えて自動車を用いて逃げる可能性を考えて、避難計画の見直しを求められている。

ただし、11年12月7日の余震で宮城県沿岸に津波警報が発表され、時のように、住民の多くが自動車を使うと、ひどい交通渋滞になる危険性がある。そのため、一時避難所の割り当てや、渋滞が発生しないような避難の方法を見直す必要がある。

私が所属する防災地域研究室では、交通シミュレーションを用いて避難時における車の流れを予測している。

具体的には、道路構造や信号などの物理的な条件のほかに、経路選択や目的地選択などの運転者の行動ルールを設定する。交通工学の理論に従い、時々刻々移動する車両の動きをパソコン上でリアルに再現することが可能である。

自動車の避難が必要となる地域では、交通渋滞が発生しないように、徒歩で内陸に到達できるように、渋滞が発生しない道路の方法を見出す。

岸辺野部を発に、津波避難時の交通シミュレーション実験を行い、道路ネットワークの問題点を解明してきた。

例えば、平常時には海岸と平行になる主要道路に沿って交通が流れている。しかし、津波避難時は、自動車が一斉に海岸線と垂直方向の内陸部に向かう。

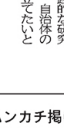
このため、平常時とは異なる場所が原因となって交通渋滞が発生する。特に垂直方向の道路への交通が集中する傾向にあり、渋滞の発端となる交差地点では、交差点の手前に車列が延びることが問題となる。

解決の糸口を探るためには、まず自治体ごとに各区の住民をどの経路を通って どこの一時避難所に避難させるのか、その時自動車の利用をどの程度認めるのか、という選択肢のシミュレーションを通して、交通渋滞の問題点を明らかにする。

避難場所の到着時刻を把握する。

それらのデータを参考に、現在の人口分布や道路の条件に合った適切な避難計画を提案するとともに、信号や道路などを改良することによる効果を確認したい。地域での避難訓練を通して、運転者の行動ルールを確認し、交通シミュレーションを現実に近づけていくことも重要である。

このように、交通シミュレーションを解析する各研究室は、地域管理者と連携して、自治体の避難計画の改善に役立てたいと考えている。



キム・ジョヨン　高都大大学院で修士と博士学位を取得。11年に東北大大学院情報科学研究科准助教を経て、12年から同大学科学研究所助教。専門は交通工学。40歳。韓国・ソウル出身。

■情報をお寄せください

防災・減災のページは、「いのちと地域を守る」をテーマに、読者とともに考え、作るページです。意見や感想、取り上げてほしい題材、防災に関する情報をお寄せください。巡回ワークショップ「むすび塾」の開催を希望する町内会などの団体も募集しています。宛先は〒980―8660仙台市青葉区五橋1の2の28、河北新報社報道部「防災・減災のページ」係。ファクスは022（264）2707。電子メールアドレスはbousai@po.kahoku.co.jp

現場から

ハンカチ掲げて安否確認

陸前高田市長部地区
コミュニティ推進協議会会長
菅野征一さん(69)

長部地区で3月、市内で震災後初めての避難訓練を行いました。震災では国道が浸水し、地区内七つの集落が分断されて孤立しました。その教訓を生かし、訓練は集落単位で実施し、集落間の情報伝達や避難場所を確認しました。子どもたちも含め計500人以上が参加し、成功でした。

避難は援護が必要な人を軽トラックで救助したり、避難を呼び掛けたりするのは、日中でも自宅にいる人たちに担当してもらっています。

津波に対する意識は高いのですが、次の大きな地震では建物被害も心配しています。今後の訓練には、倒壊家屋からの救出や救急救援を盛り込もうと考えています。

孤立想定し集落ごと訓練

ハンカチ掲げて安否確認

仙台青年会議所
未来ビジョン会議議長
大柿乃輔さん(39)

仙台青年会議所は、大規模災害時、玄関などに黄色いハンカチを掲げ、家族の安否確認の迅速化を図る「しあわせな黄色いハンカチプロジェクト」に取り組んでいます。

手始めに、ことしの3月11日、仙台市内で開催した「キャンドルナイト2014」で、来場者に約2000枚の黄色いハンカチを配りました。

東日本大震災発生時、わずか35分で全世帯の安否を確認した仙台市太白区の鈎取ニュータウン町内会（131世帯）の自主防災活動を他地区にも広めるのが目的です。

今後も、さまざまな機会を通じてハンカチを配り、毎年3月11日に掲げることで防災、共助の意識を高めてほしい。